

ワイはプリヤ！  
プリズリファアの  
イリヤ！

基本12枚差分合計196枚  
4人の魔法少女の  
HなCG集！！

「えへへ、特別だよお兄ちゃん♡」  
イリヤ

凛  
「ほら、私も直接口から  
魔力の素摂取したいから  
腰浮かせなさいよ。」

士郎  
「おおっ？こんなにおっぱいに囲まれてっ？  
いいのだから俺だけこんななの……」

R18  
ADULT ONLY

ぷりずり屋



士郎「俺は謙虚な朴念仁だから  
イリヤを大好きなお兄ちゃん達を  
連れて来たよ。」



「わあ、イリヤ  
お兄ちゃん達が魔力を補給  
させてくれるんだね。袋に魔力の素が  
いっぱい詰まってるみたい！  
よかったっすーすー！」





イリヤ「んれろれろっ♡このくびれた部分を舐められると気持ちいいのかな？私のお回気持ちいい？」



「おおっ、あのイリヤちゃんにちんちんぺろぺろ舐められてるよ！」



おま

ん

ん

ん♡

ん

ん



イリヤ「ちゅるるるうう♡

こっちのお兄ちゃんは先っぽ舐められるのがたまらないのかな？  
びくびくしちやっつて可愛い♡」



「おおおっっ！

いいの？これ本当にいいの？

イリヤちゃんのお口で

吸われてるんだ俺……。」

ちゅぽっ  
ちゅぽっ

んっ  
んっ

ちゅー♡

しゅっ  
しゅっ

びんっ♡  
びんっ♡



士郎「イリヤ！お兄ちゃんもう出そうだ！  
イリヤの顔にぶっかけるぞっ！  
チンパクトフルオープナー！海綿回路最大展開！  
さあー召し上がれ！」



ぎゃんっ♡

ドビュッ



「きゃんっ！」

ぼくねんちんぽみるくうーうー！

これイリヤの

お気に入りっ♡

ドビュッ



イリヤ「ふあ・・おいひ♡そうだ！向かいの豪邸に友達がいるから連れて来るね。私の唾液が塗布されたちんぽだからきつと美遊もおいしく舐めてくれるよ。」

あほ♡

トロオオ

ゴジュウ

ゴジュウ



「なる、それは道理だ。

イリヤは天才だな。

じゃあ唾液が乾かないうちに

早く連れて来ておくれ。」



美遊

「イリヤの唾液がコーティングされた  
性器・・・それに魔力も摂取できて  
一石二鳥・・・ゴクリ・・・」



士郎

「おいしいよ。さあ、イリヤの唾液が乾かない  
うちに召し上がれ。」



士郎

「うはあ、美遊ちゃんのおっぱい  
もっちもちしてて柔らかいよ。」



ぐんぐん

ぐんぐん

へっへっ  
へっへっ

美遊  
（士郎さんの…硬い…  
お兄ちゃんのもこんな感じに  
なるのかな…）



「ああ・・・美遊ちゃんの  
髪サラサラしてぺろぺろ  
気持ちいいよ。  
クールな感じが  
可愛いね。」 あっ...

美遊

「んっ、ぺろぺろっ

こんな感じですか？

そんな・・・

クールじゃないです・・・

結構恥ずかしいです・・・」

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ



士郎「うっ！美遊ちゃんの乗らか

おっぱいでぶりゅっとかけるよー！」



ゴッポ  
ゴッポ

んんっ

ゴッポ  
ゴッポ

美遊「あっ。。。精子。。。  
温かい。。。♡」



士郎「はあはあ……ごめんね

美遊ちゃんぶっかけちゃって……」

美遊「いえ……勉強になりました……」

（士郎さんきもちよさそうな

顔……お兄ちゃんに

したらこんな感じなのかな？）

しゅ





凛「はあ？何で私が足コキなのよ。これじゃ直接魔力を摂取できないじゃない。」  
衛宮くんの私も飲ませなさいよ。」

士郎「まあまあ、あとでたっぷり飲ませてあげるからさ遠坂、ついでに素足で足コキしてくれると嬉しいんだけど……。」

わん  
わん

わん  
わん





凛「んしょ、んしょ、すりすりしゅしゅしゅ……」

全く、こんなのが

気持ちいいなんて馬鹿みたい」

ぽんぽん

わっ  
わっ

士郎「ふはあっ、生足気持ちいいよ遠坂！」

更にノーパンで口汚く罵って

くれると最高だな。」

ん  
ん





凛「罵るの？・・・わかった・・・。  
朴念仁！これは違うか・・・。  
アホ！エロゲスケベ！  
変態赤毛！」

「えっと・・・  
高価な宝石  
尿道に詰めるわよ・・・？」



ざりざり

しこしこ



士郎「ほわああっ！高価な

尿道宝石ルビイイッ！

惜しみなく使ってくれええ！

遠坂ああっ！」

は？

凛

（ア・・・アホかこいつ・・・）

早く病院に連れていかないと・・・

ビュッ  
ビュッ  
ビュッ

ビュッ  
ビュッ  
ビュッ

ビュッ  
ビュッ  
ビュッ





凜「って・・・足に出すなああっ！  
ンゴラアアアツツ！！！」

士郎「あ、忘れてた・・・  
ゴミンニ☆」

ごんごん



ルヴィア  
「きやつ！シエロっ？  
飢えた狼に  
なったの  
ですの？」

まじやん、  
まじやん、

士郎

「はふん！お嬢様おっぱい！」

執事さんにおあずけ食らってた

ルヴィアおっぱい！執事さんに殺されそう！」

まじやん、  
まじやん、





士郎「ほおおおっ！おっばい！ちんぽが沈みこむうううっ！胸の中お風呂みたいに温かい！お嬢様とぷりぷり混浴大浴場！」

ホロリ

ズグ

おっ

ヤンキー

あう

ルヴィア「まあ！そのために私を呼んだのですの？」



ルヴィア「ま、まあどこかのツインテさんの足コキに比べたら悪い気は  
しませんわ。」

「あっんっはうんっ♡」

んっ♡  
ズッ  
ズッ  
ズッ  
ズッ  
ズッ  
ズッ  
ズッ  
ズッ  
ズッ





士郎

「ろいやる乳圧で  
ぷりゅぷりゅっと  
ぷりずり大射精!」

ドゥ、ドゥ♡

あぁっ♡

はぁっ♡

ルヴィア

「うひゃん! しえろおおっ!

乳腺でびゅくびゅく精子が

エレガントにダンスしてますわ!」

ドゥ、ドゥ!





士郎「はあはあ……満足……」  
ルヴィア「うふふっ、  
それで満足ですか？  
私達は変身するたびに  
パワーがはるかに  
増す……」

「現マスターに至ってはあと二回も変身を残している……  
その意味があなたにわかって？」





士郎「ホワアアア！ワイのプリヤ！  
プリズリファアのイリヤ！」

イリヤ  
「お、お兄ちゃん  
もちけつ！お兄ちゃんに  
一番に入れさせてあげる  
から落ち着いて、ね？」





士郎「ハアハア、ごめんよ、お兄ちゃん妹の魔法少女姿に興奮して目が血走っちゃったよ。」

あっ♡

アッ♡

イリヤ  
「妹だからって遠慮せずに  
ガンガンに突いちゃってね  
お兄ちゃん♡」





士郎「イリヤのきつきつまんじに……くっくっ！」

びびっ

イリヤ

イリヤ

「やあん♡

お兄ちゃんのおちんちん

すっごく硬くなってるよお♡」

ずんずんずん



あぁん

イリヤ  
「あっあっあんっ♡  
やんっんんんっ  
んくっ。。。♡  
はっ。。。あっ  
ああっあんっ！」

アッ  
アッ  
アッ

たっ  
たっ  
たっ





しんぱん♡♡

士郎「くっ!」

イリヤっっ!」

イリヤ  
「ふあああっ♡お兄ちゃんの  
おちんちん汁!」

クッ  
クッ  
クッ  
クッ  
クッ

ひゅっ♡  
ひゅっ♡  
ひゅっ♡





士郎「はあはあ……」

「ごめんなイリヤ少し  
激しかったか……？」

はあ♡  
はあ♡

イリヤ

「ハアハア……平気……だよ……」

「お兄ちゃんが気持ちよかったなら……んっ……」

「イリヤも……嬉しいよ……♡」

とろろ





士郎「ビャア、自分から股を開いて  
Hな気分になったのかな？」

美遊

「イリヤと士郎さんの見てたら  
変なきもちになりました……  
どうぞ……士郎さん……。」





士郎

「すべすべできめ細かい  
綺麗な肌だね。毎日おいしい物  
食べさせてもらってるんだね。」

ぷるん♡

まじ♡

美遊

「はい・・・おかげさまで・・・  
でも士郎さんの手料理の  
ばななも食べたいな・・・。」





士郎

「料理なら任せてよ。イリヤのカラメルソースがかかってとろっとすいーとなばななに仕上がっておいしいよ。召し上がれ☆」

う…あ

んんん♡

んんん♡

んんん♡

美遊

「ああああっ！イリヤの…味付け…っ！」



美遊

「はぁあんっ！これが・

士郎さんの・

ばなな・・・らんさー・

ゴキウ



「あっあっんんっ

たくましい槍に・

ふぁあんっ・・・激しく・

突かれてるっ・

ゴキウ





士郎

「美遊ちゃんのカールな  
おまんこにお兄さんの槍を  
突き立ててる・・・よっ!」

う...あ

びんん♡

美遊「ん、あっ・・・ああっ♡

んっ、熱いのが貫いて・・・  
んんっ・・・流し込まれてる・・・♡」

びんん♡  
びんん♡  
びんん♡





士郎

「おやおや、とろけそうな顔をして  
そんなによかったのかな？  
いつものクールな顔が台無しだよ。」

おあ...ちが

あ...っ♡

美遊

「はひい...おにい...さんが...  
くーるにちゆくから...んあっ...  
くーるなかおじゃなくなりまひた...♡」





士郎「なあ遠坂、エロゲしようや。

サラサラツインテ猫耳可愛いよ。」

凛「うん。何かエロゲみたいな展開よね。  
ぶっとい魔力注入して、衛宮くん♡」





士郎「この体は絶倫チンポでできていた！」

ピロリピロリピロリ、スタンデッバイ！  
遠坂の結界に挿入！あちゃあああっ！」

凜

「あああんんっっ！  
衛宮くんの  
宝具うらんっ！」

ぐぬぬぬ

アッ

アッ





士郎「くううううっっ！」

遠坂の足コキもいいけど  
生意気まんこはやっぱり最高だな！」

あ

ああん

ズン  
ズン

ズ  
ズ

ズ  
ズ

ズ  
ズ

凛

「はっ。ああっ。んっんあっ。

あふ。んっ。♡

あっ。あんっは。あっ。♡」



士郎「出るっー！遠坂っっー！」

凛「はあああんっー！えみやくううんっっー！  
あああああんっっっー！——！」



ああああ  
ああああ

びん

んんん

んんん  
や  
ぽ、

んんん



凛「はあはあ、女の子の大事な結界に  
濃ゆいの出されちゃった……♡」

あんなに  
あんなに

士郎「へへへ、遠坂のおまんこ  
ゲットだぜ……。」

ト

びゅん  
びゅん  
びゅん





士郎「おおおっ、ルヴィアの魔法少女姿……  
おっぱいが強調されてなんとエレガントな……。」

ルヴィア  
「あ、あまりじろじろ見ないでほしいですわ！  
こんな姿殿方に見られるなんて死ぬほど  
恥ずかしいのですから……。」





士郎「ああっ・・・ルヴィアの

おっぱい!!おぱおぱ

おぱーいー!」

はおん

ルヴィア

「あんっ♥あなたおっぱい星人  
なんですの?」





士郎「そうだよ！おっぱいぶるんぶるん  
社交ダンスするルヴィアを前から  
突き上げて

みたかったんだ！」

あッ♡

あん♡

ルヴィア

「あんっ！んっ、そ、そうなのですか？」

私のおっぱいを選ぶとは……

あなた見所がありますわね……

悪い気はしま……せんわ……

ん……あふ……んっっ……♡

ぶるん  
ぶるん

しゃほ♡  
しゃほ♡  
しゃほ♡

ちゅ♡  
ちゅ♡



士郎「くうっくうっくうっ！ルヴィアの  
さふあいあまんこに  
申だしするよー！」

あまん♡

ルヴィア  
「ん、ああっ  
よろしくっ  
てよ……♡  
ひあああ  
っっっ」



びびび

おん



ルヴィア「んふ……んっ……  
はあはあ……。素敵なメインディッシュ  
でしたわよシエロ……♡」

はふ……  
はふ……♡

びん……♡

士郎「へへへ……  
ルヴィアのさふあいあまん♡  
ゲットだぜ……。」

おっぱい  
おっぱい♡

くっ  
くっ♡





士郎

「よっ、と。美遊ちゃんのおまんこに入れちゃうよ。その服装いいね。何かの中世RPGの女剣士かな？」

ズン

美遊

「んんっ。。。これは。。。セイバー。。。エクスカリバーを使う剣士。。。」

んん

ずん





士郎

「エクスカリバーか、伝説でアーサー王が持っていた  
剣だね。奇遇だね、お兄さんも持ってるんだよ。」

美遊

「くすっ、知ってるよ。  
私の足元にある。。。。。」





士郎

「えくすかりばあああああっっっ！」

あ♡

あん♡

美遊

「あっ、だめっ。。。♡

おっぱい。。。ごんな。。。

揺れっ。。。あっあああっ

ひゃああああっ！ひああ。。。♡

んっんっあああんっ！」

たったっ

あっあっあっ

るるん

あっあっあっ





士郎

「約束された勝利ちんぽおおっ——！」

ああああ

美遊

「ふあああっ！  
ちんぽに敗北宣言……だよ……」





士郎  
「はああ。。。。。入れてる時の  
おまんこ、湖の乙女になってて  
具合よかったよ。。。。」

美遊

「はっあっ。。。。だっで。。。。  
しろうさんが急に激しく  
するから。。。。♡」







「おわっ！  
士郎  
どうしたんだイリヤ？  
顔怖っ！  
さっき激しくして  
おかしくなったのかな？」

ガ  
シ



士郎  
「まあいいか。脱がしちゃうぞー。  
うへへへへ、ジュルリ。」

ふるふる

イリヤ  
（あれ？どうしちゃったんだる私……）





士郎

「はあはあ、

その格好たまんないよイリヤ。。。。。」

イリヤ

（そうだ。。。。私お兄ちゃんとHしてるんだった。。。。

でも。。。。変な感じ。。。。まるでもう二人の私が

Hしてるみたい。。。。）

あ

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん



「アアッ、ンンッ  
イリヤ  
オ・ニ  
チャン・  
ハアッ、  
アアンッ」  
♡

「あっ、妹半分  
士郎  
ざおらるったっぽい！  
生きとったんかワレー！」



びるん  
びるん

すたすた

すたすた





士郎

「くううっ！ちよっと危険な感じの  
するイリヤに逆に興奮して  
お兄ちゃんイクぞっっ！」

いあッ♡

「イリヤ  
アアアッ  
オニイチャ  
……」

アッ♡

セッ♡  
セッ♡  
セッ♡

セッ♡  
ルッ♡

W





士郎  
「はあはあ

とろけちゃったねイリヤ

はあ

はあ

「ウイリヤ  
キモチ

オニイ  
ヨカツ

チャ  
タヨ

ひゅー  
ひゅー

♡  
♡  
♡





士郎

「おおっ？こんなにおっぱいに囲まれてっ？  
いいのだから俺だけこんなのに……。」

凛

「ほら、私も直接口から  
魔力の素摂取したいから  
腰浮かせなさいよ。」

イリヤ

「えへへ、特別だよお兄ちゃん♡」

むにゅ

ムニャムニャ

むにゅ



士郎「はあああつ幸せすぎる……。」

凜

「あんっ♡

イリヤちゃん

そんなに私の乳首

吸わないのっ!」

イリヤ

「ちゅうごうっ♡だって凜さんの

生意気乳首おいしいんだもん♡」





美遊「イリヤが吸うなら私だって……」

はむちゅっ♡

ちゅーっ

ん♡

ちゅーっ

ちゅーっ

ちゅーっ

凛

「やんっ！美遊ちゃん

まで……♡

もうっ！じゃあ私は

衛宮くんの全部吸って

やるんだからっ！

ずちゅるるるううっ！」

士郎

「はおおおっ！？」

嬉しいとばっちりー！」



士郎「ぷりぷりころころころりー」

美遊「んんんっ！」

凛「んぶぶぶっー？」

んん

イリヤ「あんっ♡」





イリヤ

「凜さん猫みたいに残り汁舐めて満足そうだったね。」

美遊

「最後に士郎さんの金玉を空にするのはイリヤと二人で……。」

士郎

「嬉しいけど……。」

もう限界だよ……。」

かゝ  
かゝ

ぬる  
れる

ぐんぐん  
ぐんぐん

あーん  
あーん



イリヤ「んぺろぺろ、大丈夫だよ二人なら……」

んぺろ  
いま

あま

ちゅぽ  
ちゅぽ

美遊

「イリヤと二人なら……」

ちゅぽ  
ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ



士郎「あああっー！」

あーっ  
♡

あーっ  
♡

あーっ  
♡

「何だっででできるー！」

あーっ  
♡





イリヤ「ほら、お兄ちゃんのゴールデンドロップだよ。」

「ゆっくり一緒に舐めようね美遊……♡」

はは

はは

ドロオ

ぞろぞろ

ぞろぞろ

美遊

「シツ……最後の一滴……」

風味があつて一番おいしい部分……美味……♡」

フッ……  
フッ……

